

# 実は、私、本当は・・・です。 でも、人生の危機に頑張ったんです！

この教科書の8章の著者 黒川衣代



高校生のころの私



現在の私

幼少期、親がつけたあだ名は内弁慶。中学生の頃、親戚の伯父から「お姉ちゃんの方が愛想ええな」と言われ「どーせ私は・・・」と仏頂面。高校生の私も、引っ込み思案で恥ずかしがり屋。愛想笑いなんかできない。

そんな私が30歳代半ばで、仕事を辞めてアメリカの大学院留学を決行。一生で一番の一大決心でした。長年、働きながら英語の勉強を続けていたので、遂に神様が私にも微笑んでくれたと有頂天になった。

しかし、アメリカでの学生生活は思っていた以上に甘くなかった！なんせ「しゃべってなんぼ」の文化。授業は発言重視。自発的に意見を述べるなんて、無理、無理！「日本ではどうなの？」と指名されて、ドキドキしながらしどろもどろになりながら、やっと短い文章をひねり出す。クラスメートの視線が痛い！！

「なんでこんなところに来てしまったんだろう？」と何度思ったことか。しかし、仕事を辞めて、これからの人生をかけて来たのだから、手ぶらでは帰れない。文字通り「必死に」予定より1年余分に頑張って、何とか修了できた。最後の口述試験終了後に合格と告げられた時、その場で流した涙は忘れない。嬉しさや安堵と開放感。帰国時には心身共に超、超疲労困憊。

しかし、人生最大の危機は、この後だった！！バブル経済がはじけていて、30歳代後半のおばさんには仕事がない。自費留学だったので貯金もない、寄り添ってくれる人もいない、ないないづくし！！辛い！こんなはずじゃなかった！正直、人生で一番辛かった。60歳の自分を考えると怖かった。このままじゃ最悪の場合、行き着く先は、ホームレスおばさんかも？！とにかく、アルバイトでもいいから仕事を見つけないと・・・とぼんやり思いながら、鏡の中には老けて暗い顔の自分がいた。

数ヶ月が経って、ハタと気がついた。仏頂面で暗い顔していたら、まず話しかけにくいし、面接に行ってもこの人と一緒に働きたいとは思ってもらえないな、と。こんなことに気づくなんて、火事場の馬鹿力じゃないけど、危機は人生を救うものなのか！そして私は頑張った。鏡に映る自分と向き合って、何日も微笑む練習を実行。この練習成果は、この時とその後の人生で何回かあった面接の機会にも、遺憾なく発揮することができた。

高齢者になった今も、新しく知り合う人から「いつもニコニコしてるねえ」と言われる。「え————っ！私が！」と思いつつも内心はシメシメ。悪い気はしない。でも、昔からの友人は知っている。本当は、私が小心者で根暗なことを。いろいろな自分がいて、それぞれの私を知ってくれている友人がいて、退職後の今をまあまあ楽しく過ごしている。

人は皆、いろいろな自分を持っているのだろう。まだ気づいていない、いろんな自分を見つけてください。そして、自分だけのライフコースを描いてみて！